様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　９ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2017～2021
課題番号：１６ＫＫ００９０

研究課題名（和文）認知行動療法におけるセッション内相互作用に関する国際比較研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）An international comparison of interactions among children, parents, and therapists in cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorder(Fostering Joint International Research)

研究代表者
石川　信一（Ishikawa, Shin-ichi）

同志社大学・心理学部・教授

研究者番号：９０４０４３９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　11,000,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は，認知行動療法（CBT）のセッションの様子を録画した動画を用いて，CBTプログラム内におけるセラピスト-子ども-親の間の相互作用の分析を行い，日本と欧米諸国の比較を行うことであった。本研究の結果，日本とオーストラリアの子どものCBTにおけるセラピスト-子ども-親の間の相互作用の違いが明らかになるとともに，両国における初回セッションから最終セッションにおける変化も示された。以上の結果から，CBTの文化的適応に関する臨床的な示唆が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
同じ心理療法においても，実際のセッション内において，セラピスト，子ども，親の間でどのようなやりとりの違いが国際的に見られるのかについて，本研究では初めて実証的に示すことに成功した。この成果は，異なる文化における心理療法の文化的適応に関する臨床的な示すものである。さらに，本研究で用いた国際比較の方法は，他国間での実施や，他の心理療法や障害における比較にも拡張可能な手法であり，当該分野の更なる研究促進につながるものであると言える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to compare therapeutic interactions across CBT treatment delivered with two different cultural groups. We developed an observational coding system to examine behaviors exhibited by child, parent, and therapist during CBT sessions. Our results found significant differences between the two countries with respect to the treatment readiness of children, the proportion of talking during the sessions by parents and children, therapists' laughter, length of silence during the first session, and parent indices of accommodation. This study suggests that interactions between a child, parent, and therapist during CBT sessions may be affected by the culture in which the CBT session occurs, which could have implications for culturally adapted CBT programs.

研究分野：臨床心理学

キーワード：認知行動療法　児童　青年　不安　文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

（１）現在の心理療法のエビデンスと課題

児童青年期の不安症に対する心理社会的介入においては，　認知行動療法（CBT）が支援の第一選択肢として確立されている（Higa-McMillan et al., 2016）一方で，主に欧米諸国の限られた文化に属する研究協力者を対象として実施された研究に基づき確立された実証に基づく心理社会的介入を，どのように他の国や文化に適応をさせ，普及させていくかは大きな課題となっている。

（２）日本の児童青年期の不安症に対する CBT の有効性

このような課題を受け，筆者らは児童青年期の不安症に対する CBT の有効性を検証するために，日本初のランダム化比較試験（RCT）を行った（Ishikawa et al., 2019）。本研究は，日本のみならず，非英語圏アジア諸国における最初の RCT であった。その結果，CBT に参加したグループの半分（50%）が主たる不安の問題から改善していたのに対して，まだ参加していない子どもでは 12%のみであり，効果に有意な差が見られた。終了後半年では，66%以上の子どもにおいて，主たる不安の問題が見られた。これらの成果を総括すると，日本においても国際的な水準と同レベルで CBT の有効性が証明されたといえる（James et al., 2020）。

（３）CBT の文化適応に関する実証的データの必要性

上記の RCT では，我が国における CBT の日本における普及可能性（dissemination）については検証可能であるものの，他文化，特に CBT が開発された欧米諸国との違いについては明らかにすることができない。そこで，日本で録画された CBT セッションの様子を他国の CBT セッションと比較することで，CBT における文化的適応（cultural adaptation）に関する実証的なデータを得ることが可能となる。

２．研究の目的

本研究の目的は，日本とオーストラリアで行われた無作為割り付け比較試験（RCT）内で実施された CBT セッションの様子を録画した動画を用いて，プログラムの核となる共通の構成要素におけるセラピスト-子ども-親の間での相互作用の分析を行い，日本と欧米諸国における当該データの比較を行うことであった。

３．研究の方法

（１）行動評定尺度の作成

2018 年 4 月 1 日から 2019 年 3 月 31 日までの１年間，オーストラリアの Macquarie University にて研究を行った。まず，国際比較を可能とする行動評定システムを開発するために，オーストラリアの CBT セッションである Cool Kids プログラムを観察することとした。上記 RCT における臨床経験と，オーストラリアにおける CBT セッションの特徴を比較することで，国際比較に有用な行動評定システムの開発を目指した。まず，Macquarie University に設置された Center for Emotional Health の客員教授として正式任用され，守秘義務のある Cool Kids プログラムの CBT セッションのビデオにアクセスする資格を得た。次に，Cool Kids プログラムの研修を受け，治療構造を把握した。Cool Kids プログラムは，大規模な RCT（Hudson, Rapee, Deveney, Schniering, Lyneham, & Bovopoulos, 2009）においてその有効性が確認されている世界的に普及したプログラムの一つである。以上のトレーニングを完遂し，Cool Kids プログラムの概要を把握したうえで，CBT プログラムの実際を観察し，日豪の比較の上で重要となる要素を拾い上げていくこととなった。その後，共同研究者である Macquarie University の Jennifer Hudson 教授との協議のうえで，Cross-cultural Behavioural Observation System（C-BOS; Ishikawa & Hudson, 2019）の開発を行った。C-BOS は親子の行動を評定する既存のシステム（Family Observation Schedule-VI; FOS, Pasalich & Dadds, 2009）を基盤に開発され，子どもの CBT セッションにおける子ども，親，セラピストの行動を評定することができる世界初の行動評定システムである。

（２）行動評定によるデータの収集

続いて，C-BOS の暫定版を用いて，評定者トレーニングを行った。評定者は現地において，CBT の臨床経験のある大学院生以上のセラピストを研究アシスタント（RA）として雇用することとなった。大学間協定に基づき，国際共同研究加速基金の予算を用いて Macquarie University に所属する RA３名を雇用した。RA に対する半日の行動評定トレーニングを行った後，実際のケースについて暫定的な行動評定を行い C-BOS の改定を行った。同時に，日本においても博士課程（後期課程）の学生をアルバイトとして雇用して，同様の手続きを行った。合計３回の修正を経て，最終的に C-BOS の完成版が作成された。

C-BOS は，子どもの CBT における，子ども，親，セラピストのやり取りを評定するために準備された４つの領域とその下位尺度から構成される。第一の領域は，子どもの CBT セッションに対する準備性（Readiness）を測定する領域である。準備性は，開始（Initiation）と 潜時（Latency）の下位尺度から構成される。開始は最初のセッションで子どもが自分の不安刺激や

場面に言及できるか否かを測定し，潜時はセラピストから質問されたときに，子どもが自分の不安刺激や場面を答えることができるまでの正確な時間から測定される。第二の領域は，ダイナミクス（Dynamics）であり，インターバル行動評定に基づいた２つの下位尺度から構成される。主導権（Initiative）は，そのセッションにおける個人（子，親，セラピスト）の話す割合（つまり，セッション内の発話のパーセンテージ）を表し，流暢性（Fluency）は，CBT セッションの流暢さを代表する行動の頻度を測定している。具体的には，笑い（Laughing）と沈黙（Silence）によって評定される。以上の測定から，CBT セッション内の三者の力動を数値化する試みを行っている。第三の領域である手助け（Accommodation）は，親の子どもへのかかわりに焦点を当てており，３つの下位尺度から構成される。会話の方向性（Direction to talk）では，セラピストから子どもへの質問に対して，子どもが親の方を見るという反応が観察される行動をカウントする。代弁（Speak for）では，セラピストの子どもへの質問に対して，親がその質問に代わりに答える行動をカウントする。最後に，横やり（Interruption）は，親はどのくらいの頻度で子どもとセラピストとの会話に横やりをいれるか，について測定する下位尺度であり，セッション内のセラピストと子どもの会話，もしくは３名で共有されている会話であっても親が言葉をどちらかの言葉の上から言葉を重ねるという行動でカウントされる。最後に，第四の領域である志向性（Orientation）は，セラピストの行動に焦点を当てており，２つの下位尺度が準備されている。まず，遠回り（Detouring）は，セッションが開始された時間から，セラピストが CBT セッションの核となる話題を持ち出すまでの時間の差を測定する。準備性と対応する形でセラピストが中心的話題を実施するまでにどの程度時間をかける必要性があるかを反映していると考えられる。最後に，言語化（Verbalization）は，セッション内で用いられた情緒状態を表現する言葉を抽出し，その頻度を測定している。この下位尺度は，感情表現がどのくらい直接的に両国で行われているか，あるいはあいまいな表現がどの程度用いられているかを明らかにするために測定される。

（３）分析対象と分析計画

選択基準を満たした 7-15 歳の不安症の子どもを含む 60 名の家族（日本 30 家族，オーストラリア 30 家族）が分析の対象とされた。いずれも各国の RCT に参加した家族のデータを二次的に分析した。最初のセッションに加えて，最終セッション（日本では８セッション目，オーストラリアでは 10 セッション目）が分析対象とされた。本報告では，準備性（Readiness），ダイナミクス（Dynamics），手助け（Accommodation）の成果について報告する。最初セッションのみで測定される準備性（Readiness）については，両国の差をχ２検定と分散分析を適用した。最初と最後のセッションを有する残りのデータについては，時期（2）×国（2）の分散分析を行い，人口統計学的変数に有意な違いが生じている場合は，当該変数を共変量とした共分散分析を行った。

４．研究成果

（１）準備性（Readiness）

開始（Initiation）の両国差を検討した結果，オーストラリアでは 80%の児童が不安の対象について話すことができたのに対して，日本では 33.33%であり，その差は有意であった（$p < .01$）。一方で，潜時（Latency）には，両国に有意な差は認められなかった（*n.s.*）。

（２）ダイナミクス（Dynamics）

主導権（Initiative）について分析を行った結果，子どもの発話量について両国の間で有意な差がみられ，オーストラリアの子どもの方が多く話していることがわかった（$p < .05$）。親の発話量については，時期と国の交互作用が有意であった（$p < .05$）。下位検定を行った結果，親の発話量はオーストラリアの方が日本よりも有意に多かったが，最初のセッションよりも最終セッションの方が増えているのは両国共通であった（Fig. 1）。さらに，セラピストの発話量についても交互作用が有意であり（$p < .01$），オーストラリアのセラピストのみ，最終セッションで有意に発話量を減らしていることが分かった。そして，最終セッションを比べた場合のみ，日本のセラピストがオーストラリアのセラピストよりも発話量が多かった。

流暢性（Fluency）について，子どもと親の笑いに有意な結果は得られなかった。唯一，セラピストの笑いにのみ，有意な結果が得られて日本のセラピストの方が笑いの割合が多いことが示された（$p < .01$）。沈黙については，交互作用が有意であり（$p < .05$），最初のセッションを比較した場合，日本のセッションの方が長く沈黙していることが示された。さらに，日本のセッションのみ最終セッションでは沈黙の割合が減少していることが分かった。

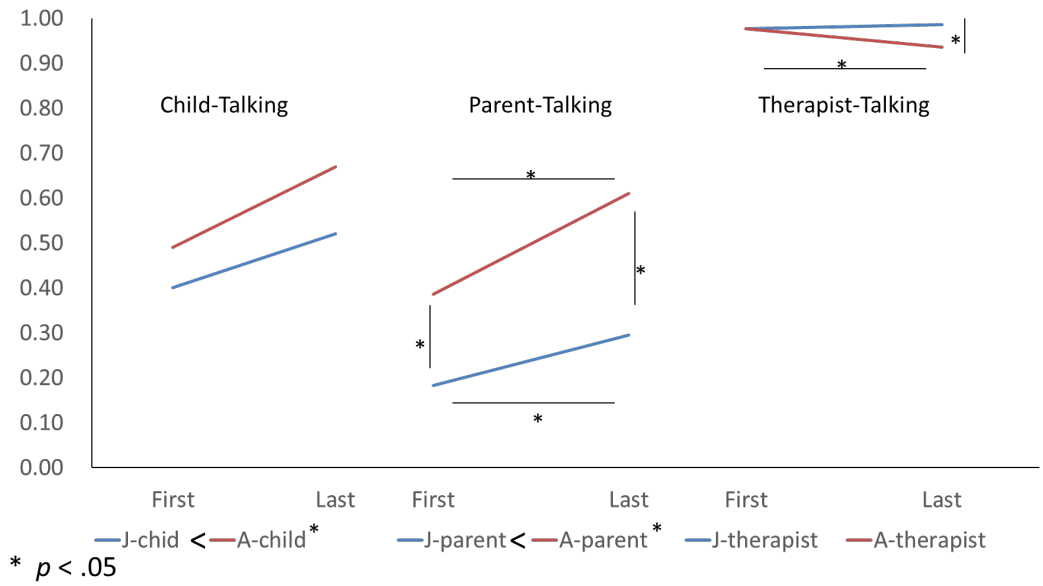

Fig. 1　Difference between two countries for Initiation at the first and last sessions
Note: A = Australian, J = Japanese

（3）手助け（Accommodation）

会話の方向性（Direction to talk）について，時期と国による差について検討したところ，オーストラリアの子どもの方が多く，質問されたときに親の方を見ることが分かった（$p < .05$）。代弁（Speak for）については時期や国による差は見られなかった。横やり（Interruption）については，時期と国の交互作用が有であった（$p < .05$）。最終セッションにおいて，オーストラリアの親は，日本の親より多く，子どもとセラピストとの会話に横やりをいれること，最初のセッションに比べてその行動を多く示すことが明らかとなった（Fig. 2）。

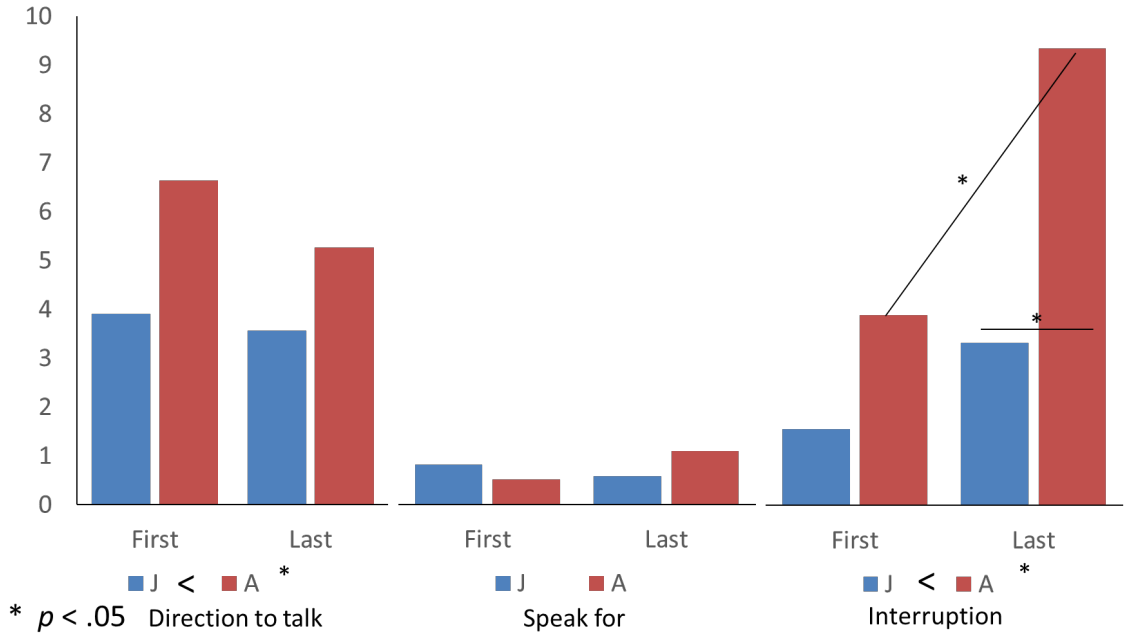

Fig. 2　Difference between two countries for Accommodation at the first and last sessions
Note: A = Australian, J = Japanese

（4）まとめ

本研究においては，CBT セッションの実際のやり取りを測定できる世界初の行動評定尺度である C-BOS が開発され，それに基づき日本とオーストラリアの実証的なデータが収集された。そして，実際のセッション内での，子ども，親，セラピストのやりとりについての両国での違いが数量的に表されることとなった。このデータは，この成果は，心理療法の文化的適応についての実証的データを提供するという意味で，世界的にも価値あるものになることが期待される。そして，この成果は，CBT を専門とする研究者に広く知られる国際誌 Behavior Therapy への掲載を通じて発信されることとなった（Ishikawa et al., 2022）。

文献

Higa-McMillan, C. K., Francis, S. E., Rith-Najarian, L., & Chorpita, B. F. (2016). Evidence base update: 50 years of research on treatment for child and adolescent anxiety. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 45*(2), 91–113. https://doi.org/10.1080/15374416.2015.1046177

Hudson, J. L., Rapee, R. M., Deveney, C., Schniering, C. A., Lyneham, H. J., & Bovopoulos, N. (2009). Cognitive-behavioral treatment versus an active control for children and adolescents with anxiety disorders: A randomized trial. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 48*(5), 533–544. https://doi.org/10.1097/CHI.0b013e31819c2401

Ishikawa, S., & Hudson, J. L. (2019). *Cross-cultural Behavioural Observation System: Coding behavioural coding manual and calculation sheets* (3rd ver.). Faculty of Psychology, Doshisha University.

Ishikawa, S., Kikuta, K., Sakai, M., Mitamura, T., Motomura, N., & Hudson, J. L. (2019). A randomized controlled trial of a bidirectional cultural adaptation of cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders. *Behavior research and Therapy, 120*, 103432. https://doi.org/10.1016/j.brat.2019.103432.

Ishikawa, S., Romano, M. & Hudson., J. L. (2022). A comparison of interactions among children, parents, and therapists in cognitive behavior therapy for anxiety disorders in Australia and Japan. *Behavior Therapy, 53*, 34-48. https://doi.org/10.1016/j.beth.2021.05.008.

James, A. C., Reardon, T., Soler, A., James, G., & Creswell, C. (2020). Cognitive behavioural therapy for anxiety disorders in children and adolescents. *The Cochrane database of systematic reviews, 11(11)*, CD013162. https://doi.org/10.1002/14651858.CD013162.pub2

Pasalich, D. S., & Dadds, M. R. (2009). *Family Observation Schedule* (6th ed.). Child Behaviour Research Clinic, School of Psychology, University of New South Wales.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石川信一・小野昌彦	４．巻 46
２．論文標題 教育分野への認知行動療法の適用と課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 認知行動療法研究	６．最初と最後の頁 99-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Krause, K. R., Abiodun, S., Adewuya, A. O., Albano, A. M., Babins-Wagner, R., Birkinshaw, R., Brann, P., Creswell, C., Delaney, K., Falissard, B., Forrest, C. B., Hudson, J. L., Ishikawa, S. ...& Wolper, M.	４．巻 8
２．論文標題 International consensus on a standard set of outcome measures for child and youth anxiety, depression, obsessive-compulsive disorder, and post-traumatic stress disorder	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Lancet Psychiatry	６．最初と最後の頁 76～86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/S2215-0366(20)30356-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Creswell, C., Nauta, M. H., Hudson, J. L., March, S., Reardon, T., Arendt, K., Bodden, D., Cobham V. E., Donovan, C., Halldorsson, B., In-Albon, T., Ishikawa, S. … & Kendall, P. C.	４．巻 62
２．論文標題 Research Review: Recommendations for reporting on treatment trials for child and adolescent anxiety disorders ? an international consensus statement	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Child Psychology and Psychiatry	６．最初と最後の頁 255～269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jcpp.13283	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Ishikawa Shin-ichi、Kikuta Kazuyo、Sakai Mie、Mitamura Takashi、Motomura Naoyasu、Hudson Jennifer L.	４．巻 120
２．論文標題 A randomized controlled trial of a bidirectional cultural adaptation of cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Behaviour Research and Therapy	６．最初と最後の頁 103432～103432
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.brat.2019.103432	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 石川信一	4．巻 9
2．論文標題 ワークブックを活用して認知行動療法をどのように伝えるか：イラストでわかる子どもの認知行動療法 困ったときの解決スキル36	5．発行年 2019年
3．雑誌名 心理臨床科学	6．最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin-ichi、Takeno Yayoi、Sato Yoko、Kishida Kohei、Yatagai Yuto、Spence Susan H.	4．巻 10
2．論文標題 Psychometric Properties of the Spence Children’s Anxiety Scale with Adolescents in Japanese High Schools	5．発行年 2018年
3．雑誌名 School Mental Health	6．最初と最後の頁 275～286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12310-017-9242-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 野中俊介・岡島純子・三宅篤子・小原由香・荻野和雄・原口英之・山口穂菜美・石飛　信・高橋秀俊・石川信一・神尾陽子	4．巻 58
2．論文標題 自閉スペクトラム症児童の不安に対する集団認知行動療法プログラムの開発：実施可能性に関する予備的検討	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本児童青年精神医学会	6．最初と最後の頁 261-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊田和代・石川信一	4．巻 43
2．論文標題 認知行動療法プログラムの柔軟な適用：エクスポージャーに協働関係をいかした事例	5．発行年 2017年
3．雑誌名 精神療法	6．最初と最後の頁 549-557
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川信一	4．巻 17
2．論文標題 子どもの心の問題とレジリエンス	5．発行年 2017年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 607-612
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川信一	4．巻 1048
2．論文標題 認知行動療法による支援	5．発行年 2017年
3．雑誌名 児童心理	6．最初と最後の頁 1048
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川信一	4．巻 9
2．論文標題 日本における子どもの不安症に対する認知行動療法	5．発行年 2017年
3．雑誌名 不安症研究	6．最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川信一	4．巻 196
2．論文標題 学校臨床の現場から	5．発行年 2017年
3．雑誌名 こころの科学	6．最初と最後の頁 46-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　5件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Ishikawa, S.
２．発表標題 A culturally-adapted cognitive behavior therapy for children with anxiety disorders: The West might find the East heading toward a CBT new era
３．学会等名 13th International Congress of Clinical Psychology（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石川信一
２．発表標題 子どもの不安に対する認知行動療法
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石川信一
２．発表標題 子どもの認知行動療法－20年の歩み－
３．学会等名 日本認知療法学会第20回大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石川信一
２．発表標題 児童思春期に対する認知行動療法
３．学会等名 第19回日本認知療法・認知行動療法学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石川信一
２．発表標題 学校教育の中で認知行動療法が生き延びるためには？
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石川信一
２．発表標題 子どもの認知行動療法－困った！こんなときどうする？
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ishikawa, S., Kikuta, K., Sakai, M., & Mitamura, T., & Motomura, N.
２．発表標題 A randomized control trial of cognitive behavior therapy for children and adolescents with anxiety disorders in Japan.
３．学会等名 The 52nd Association for Behavioral and Cognitive Therapies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ishikawa, S., Takeno, Y., Sato, Y., Kishida, K., Yatagai, Y., & Spence, S. H.
２．発表標題 Psychometric properties of the Spence Child Anxiety Scale with adolescents in Japan.
３．学会等名 The 51st Convention of Behavioral and Cognitive Therapies（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計6件

1．著者名 岡島　義、金井　嘉宏	4．発行年 2020年
2．出版社 弘文堂	5．総ページ数 320
3．書名 使う使える臨床心理学	

1．著者名 大野裕・堀越勝・田島美幸	4．発行年 2020年
2．出版社 培風館	5．総ページ数 198
3．書名 集団認知行動療法の進め方	

1．著者名 日本認知・行動療法学会	4．発行年 2019年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 828
3．書名 認知行動療法事典	

1．著者名 日本健康心理学会	4．発行年 2019年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 746
3．書名 健康心理学事典	

１．著者名 岡島　義、金井　嘉宏	４．発行年 2020年
２．出版社 弘文堂	５．総ページ数 320
３．書名 使う使える臨床心理学	

１．著者名 石川信一、スギウラフミアキ	４．発行年 2018年
２．出版社 合同出版	５．総ページ数 152
３．書名 イラストでわかる子どもの認知行動療法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

石川研究室HP
http://ishinn.doshisha.ac.jp/
児童青年認知行動療法学会HP
http://ishinn.doshisha.ac.jp/CACBT.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

オーストラリア	Macquarie University			
英国	University of Oxford			